

オール・ザ・キングスメン

2007(平成19)年2月27日鑑賞(ソニー・ピクチャーズ試写室)

★★★★



監督・脚本・製作＝スティーヴン・ゼイリアン／原作＝ロバート・ペン・ウォーレン『すべて王の臣』(白水社刊)／出演＝ショーン・ペン／ジェード・ロウ／ケイト・ウィンスレット／ジェームズ・ガンドルフィーニ／マーク・ラファロ／パトリシア・クラークソン／アンソニー・ホプキンス(ソニー・ピクチャーズ エンタテインメント配給／2006年アメリカ映画／128分)

第3章

観終わったら議論したくなる

……シリーズものに頼りがちだったハリウッド映画の底力を見せつける名作が誕生！ 1949年のルイジアナ州知事選挙は、東国原知事を生んだ宮崎県知事選の良き教科書……？ 弱者・貧者の代弁者を自負するウィリーの演説は、『ラストキング・オブ・スコットランド』の Amin 大統領と同じ、熱意に満ちた感動的なもの。しかし、権力はいつしか腐敗する運命を……？ 政治とカネ、女性スキャンダルによるウィリー知事に対する弾劾決議への対抗策は……？ そして衝撃のラストシーンは……？ この映画最大の良さは、日本の甘っちょろいマスコミの目と異なり、悪は悪として必ず存在するという目で、それをしっかりと描いていること！ 「善は、悪からも生まれる」という言葉の重みを十分噛みしめたうえで、民主主義についてしっかりと考えたいものだ。

これがハリウッドの底力……

最近ハリウッド映画の人气が落ちているが、それは安易なシリーズものに頼っているため。しかし、この『オール・ザ・キングスメン』のような骨太の問題提起作を観ると、さすがこれがハリウッドの底力だと感心させられることに……。

時は1949年。私が生まれた年で、今から58年前のこと。舞台はアメリカのルイジアナ州のメーソン市。アメリカは1945年に第二次世界大戦に勝利したことによって、1945年から1950年代初頭にかけて未曾有の好景気を享受していたはずだが、

実力主義を標榜するアメリカは人種差別を含めて実は大きな格差社会であったことは常識……？

それはともかく、この映画はそんなメーソン市で郡の出納官をしていたウィリー・スターク（ショーン・ペン）と上流階級出身でクロニクル紙の新聞記者ジャック・バーデン（ジュード・ロウ）の2人が主人公。そして原作は実話を基にしたもの。土建国家ニッポンでは公共事業談合が有名で、それをめぐる事件が後を絶たないが、1949年のアメリカでもそれは同じ……？ 実直なウィリーは、市の小学校建設について不正入札があったと鋭く非難していたが……。

演説は最大の武器であることを実感！

アメリカでは2007年の今、2年後の大統領選挙に向けて、民主党から女性候補ヒラリー・クリントンと黒人候補バラク・オバマが立候補を表明し、既に選挙戦に突入した感さえも……。ニュースで観る故ジョン・F・ケネディ大統領の演説にしても、現在のオバマ候補の演説にしても、アメリカの政治家の演説はカッコいいものが多い。また、『マルコム X』（92年）を観た時の、マルコム Xの布教演説も同じ。さらに、何度もニュースで観たヒトラーの演説が聴衆を熱狂させたのも当然で、有名な『チャップリンの独裁者』（40年）の6分間にわたる演説シーンを観ていると、それだけで感動的……？

このように、演説が大きな武器であることを実感させてくれるのが、ルイジアナ州知事に立候補したウィリーの演説。この映画における彼の演説は感動的で、観客席からでも思わず拍手したくなっていくほど……。彼の演説は、「エビータ」で有名なアルゼンチンのファン・ペロン大統領の演説や、『ラストキング・オブ・スコットランド』（06年）におけるアミン大統領の演説と同じで、自分は弱い者・貧乏な者のために立候補したもので、強者や富裕層は敵であることを明確に宣言したもの。二者択一を迫る演説はわかりやすいし、敵・味方をはっきりさせ、勝敗が投票という行為によってハッキリ形に現れることを納得させることができれば、それまで選挙なんて自分には関係ないと思っていた人たちも勇んで投票するもの……。そんなことを日本ではじめて実感させたのが、小泉純一郎元総理による9・11総選挙だったが、ウィリーの演説はまさにそれ……？

ウィリーはもともと高級車に乗って現れた州の役人タイニー・ダフィ（ジェームズ・ガンドルフィーニ）から出馬依頼を受けた候補者。ところが、選挙戦の最中、美人広報官のセイディ・バーク（パトリシア・クラークソン）から、ウィリーは対立候補の票を割るための「当て馬」として利用されただけだと聞かされたウィリーは、以降用意された演説原稿を読むのをやめた。そして、自らの言葉によって力強く、自分と同じ弱者・貧者に対して強者・富者との対決をアピールし始めたことによって、見事、地滑り的大勝利を……。

日本でもつい最近同じことが……

日本では、地滑りの勝利を収めたのは、かつての東京都の青島幸男、大阪府の横山ノックのように、浮動票を集めた著名な芸能人が多い。しかし1970年代の美濃部亮吉革新都政、大阪府の黒田一革新府政の誕生は、まさに保革が真正面から対決する中で生まれたもの。今の日本では、保革対立は過去のものだし、二大政党制の実現もほど遠い状況。そんな中、現在は政党の支持 vs. 無党派の支持、という対立軸が顕著になっている。ウィリー知事の誕生は、弱者・貧者 vs. 強者・富者のガチンコ対決の結果だが、日本でもつい最近、政党支持派と無党派支持派とのガチンコ対決の結果、地滑りの勝利を収めたのが、宮崎県のそのまま東こと東国原英夫知事。彼の知事就任後1週間の広報活動による経済波及効果は約165億円と言われており、目下のところ順調だが、問題はこれから……。まさか彼が、『ラストキング・オブ・スコットランド』のウガンダのアミン大統領やこの映画のウィリー知事と同じように、大きく変貌し権力に固執するとは思えないが、監視の目を怠らないようにしなければ……？

それから5年、映画の技術は面白い……？

タイムスリップものを典型として、映画は監督の裁量によって自由に時代を行き来させることができるところが面白い……。この映画は冒頭、車の中で話しているウィリー知事とジャックの姿が映し出される。彼らが今日指しているのはアーウィン判事（アンソニー・ホプキンス）の家。車の中での会話を聞いていると、州議会におけるウィリー知事の弾劾決議にアーウィン判事が賛成したとの情

報を受けて、その翻意のために向かっているらしい。地滑りの勝利を収め、州民の圧倒的支持を受けていたはずのウィリー知事がなぜ今、弾劾決議を……？

長野県の田中康夫元知事の例を見てもわかるように、ビックリ箱を開けた後、あまりにも急激に時計の針を進めた場合、支持者がそれについてこれないケースは起こりうるし、何よりも知事の信念や姿勢自体が変貌してしまう危険性は誰にでもあるもの。ウィリー知事の場合、5年後の今、議会から弾劾決議を突きつけられているのは、大病院建設をめぐる知事の汚職問題のためらしい。もちろん、ウィリーはそれを否定、あるいは少しはあるとしてもそれは潤滑油であり、問題は石油会社・電力会社の不正だとアピールしているが、自分自身でも弱みを感じている様子……？　そこで、ジャックの父の父親同然であったアーウィン判事の翻意を促すために訪れたわけだが、残念ながら結果はムダ骨。そこで、ウィリーがとった次の戦略は……？

後半におけるキーパーソンの1人は……？

ジェームズ・キャメロン監督の超大作『タイタニック』(97年)のローズ役にレオナルド・ディカプリオと共演し、22歳にしてアカデミー賞主演女優賞にノミネートされ、世界的大スターになったのが、豊満な胸を誇る(?)ケイト・ウインスレット。そのケイト・ウインスレットがこの映画では、ジャックの初恋の女性アン・スタントン役として登場する。映画の冒頭から彼女が登場しないのは、ウィリー知事とジャックのサクセスストーリー(?)を描くうえで、ジャックのかつての上流階級の友人たちは不要だったため。しかして、今その登場が必要となったのは、人間は誰にでも何らかの追及される点があるはずだという確信を持つウィリー知事の指示を受けて、ジャックがアーウィン判事の過去を暴こうとしたため。ジャックとアンとの美しい初恋の様子や、ドレスを脱ぎベッドに横たわるアンとなぜ1つにならなかったのかという微妙なジャックの気持の揺れは、スクリーン上でじっくりと味わってもらいたいが……。

もう1人のキーパーソンは……？

後半もう1人のキーパーソンとなり、衝撃的なラストシーンで大きな役割を果

たすのが、アンの兄のアダム（マーク・ラファロ）。このアダムとアンの兄妹はルイジアナ州の前知事の血筋だから、ウィリー知事にとっては彼らと結びつくのは、ある意味で弱者・貧者への裏切り行為……？ しかし今、膨大な費用をかけてアメリカ最大の病院を建設しているウィリー知事にとっては、何が何でもそれを成功させなければならず、そのためにはアダムをその病院長に迎えるのがベストチョイスと判断したわけだ。

そこで、アダムに対するその説得役を、アダムのかつての親友であったジャックに命じたのは当然。今はすべての表舞台から引退しているアダムに対して、ジャックが説得のために使った文句は、「知事は“悪”でも、病院は“善”だ。“善”は“悪”からも生まれるんだ」というもの。これによって、アダムは病院長に就任し、アダムの手を高々とあげるウィリー知事の写真が新聞を飾った。そして、今やアンもウィリー知事の支持者として表舞台に……。これによって、ウィリーの目論見は一步また一步と順調に進んでいくかに見えたが……？

ウィリー知事の弾劾決議は……？

この映画を観てはじめてわかったのは、ルイジアナ州議会における知事の弾劾決議の採決は、議長から名前を呼ばれた議員が1人ずつその賛否を口頭で述べることによって行うということ。今ではボタン投票で済むところをこんなまどろっこしい儀式をやるのは、やはり今から約50年前の1950年代……。それはともかく、弾劾決議は数票の差ながら、ウィリー知事の思惑どおり見事に否決。これによって、危機を脱したウィリー知事の権力は磐石のものとなったから、彼は会心の笑みを浮かべながら、弾劾派の議員に対し高らかに勝利宣言をしたが……。

衝撃のラストシーンは……？

そこに現れたのが、今はウィリー知事から見放されてしまったセイデイから、アンとウィリー知事との関係についてショッキングな情報を聞いたジャック。その情報とは、「あの女と寝たお礼に、ウィリー知事は兄のアダムを病院長にした」というもの……。あの初恋の女性アンが……？ そして、ベッドに横たわるアンと当たり前の男と女の関係になったのでは、得られるもの以上に何か大きなもの

が失われると感じて最後の一线を超えなかったジャックであったのに……？ 知事就任以来、急速に好色の目が広がり、あちこちの女に手を出してきたウィリー知事が、何とあのアンまでも……？

それを知ったジャックはアンに対して怒りの言葉をおつけ、憔悴しきった顔で、今勝ち誇った顔のウィリー知事の前に登場した……。すると、これも憔悴しきった顔で、手に何かを隠し持ちながら現れたのがアダム。ジャックもショックだったが、自分の妹がウィリー知事と寝たお礼に自分が病院長になっていると知ったアダムのショックと怒りはそれ以上……。そこで、アダムがとった行動とは……？ 印象的な州議会1階のホールで展開される衝撃的なラストシーンには、あなたも思わず息を呑むはず……？

「敵の敵は味方」、そして「善は、悪からも生まれる」……

このハリウッド映画がすごいのは、良くも悪くも民主主義の国アメリカらしく、悪を悪としてしっかりと直視し、それを真正面から描いていること。この点が、つい先日観た『天国は待ってくれる』(07年)や『幸福な食卓』(06年)など、善人ばかりが登場する近時のホームドラマの日本映画とは大違い。かつては日本でも、野村芳太郎監督の『鬼畜』(78年)や『わるいやつら』(80年)など、悪を真正面から描いた傑作がたくさんあったが、最近はめっきりそれが少なくなり、せいぜい悪女がハマリ役となった米倉涼子の『黒革の手帖』や『けものみち』『わるいやつら』などのテレビドラマくらいしかなくなったのは残念……。

「敵の敵は味方」と言ったのは毛沢東だが、それと同じような意味で、この映画でジャックが吐く名言は「善は、悪からも生まれる」。政治家のやることがすべて国民のためであり、すべて善であるなどというのは、そもそもありえないことがわかれば、今の日本のマスコミがモグラ叩きのようにやっている、政治家の悪を次々と暴露して悦に入っている姿がいかにナンセンスであるかわかるはず。「毒をもって毒を制す」と昔からよく言われているが、「善は、悪からも生まれる」も、それと同趣旨の言葉であり、けだし名言……。

2007(平成19)年2月28日記